

怡土・志摩の村を歩く

楠瀬, 慶太
九州大学大学院比較社会学府日本社会文化専攻 : 修士課程

浦谷, 拓
九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士後期課程

木戸, 希
九州大学文学部人文学科歴史学コース

田中, 由利子
九州大学大学院比較社会文化学府 : 博士後期課程

他

<https://doi.org/10.15017/1655044>

出版情報 : 2009-03-01. 九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
バージョン :
権利関係 :

目次

地域資料叢書 10『怡土・志摩の村を歩く』の刊行に寄せて

第1部 怡土・志摩郡と中世怡土庄

1、はじめに	1
2、位置と環境	1
3、怡土庄の歴史	2
4、研究史と問題の所在	4
5、調査・研究の概要	5
6、資料と方法	5
7、本書の構成	6

第2部 怡土・志摩の村を歩く【地誌編】

第1章 福岡市西区域の諸相	8
1、今津一桝網と浜崎の漁業	9
2、宮浦一唐泊と漁業	15
3、西浦一「浜」と「岡」の交流	19
コラム① 西浦の盆踊唄	20
4、玄海島一上方・下方と玄海島の鯛網漁	26
コラム② 玄海島と百合若伝説	30
第2章 志摩町域の諸相	31
1、桜井一「桜井三千石」と駄祭り	31
2、野北一鯛網・鯛網における1号組と2号組の競争	36
3、芥屋一芥屋男の住まう村	45
4、岐志一江戸期の開拓と新開地名	49
5、姫島一最果ての志摩より	52
6、船越一仲西源蔵と善応庵	56
7、久家一「小瀬まわり」と干拓地の水利慣行	59
8、松隈一ミカンの構造改園と農業	62
9、津和崎一野北・吉田・新田からの移民と開発	66
コラム③ 地域の歴史と公民館活動一志摩町立中央公民館の取り組み	70
第3章 前原市域の諸相	71
1、王丸一高祖城の木戸番	72
2、川原一ゲンゼ岩とじゅうろん様	75
3、瑞梅寺一水酒と水源の村	80
4、飯原一小字統合と地字	89

5、長野・川付—長野庄故地を歩く—	93
6、白糸—白糸の滝とカンミソギ—	100
コラム④ 近世脊振弁財嶽国境争論における佐賀藩の勝訴の要因	104
第4章 二丈町域の諸相	105
1、福吉—福吉漁港の活況—	105
2、鹿家—消滅した小漁村へ—	110
3、満吉・一貴山	113
コラム⑤ 現代の深江神幸祭と大名行列	118
第5章 大正～昭和初期における怡土・志摩の地域構造	119

第3部 怡土庄の歴史的諸相【分析編】

第1章 中世怡土庄の開発と村落景観	123
第2章 周辺庄園の諸相	128
第3章 瑞梅寺川流域における中世石塔の出現と終焉	132
第4章 漁具の生産・流通システムから見た中世博多湾沿岸地域	151
第5章 近世における脊振弁財嶽国境争論と福岡藩	160
第6章 玄界灘沿岸の細石刃文化	168

第4部 怡土・志摩の現代的諸相【現代編】

第1章 糸島郡志摩町における農業の概況と今後の展望	190
第2章 糸島郡志摩町における耕作放棄地の発生要因とその背景	196
第3章 明治期の福岡県地価帳による桜井集落の田畑の階級と耕作放棄地の関連性	203
第4章 糸島郡志摩町の農業法人と前原市井原山地区の農業体験型施設の事例分析	206
第5章 九州大学のキャンパス移転と町・村の変化	211

調査協力者一覧

編者あとがき

地域資料叢書 10『怡土・志摩の村を歩く』の刊行に寄せて

楠瀬慶太さんが『怡土・志摩の村を歩く』を刊行された。修士論文執筆時の調査成果である。私達の研究室は1999年、『筑前国怡土庄故地現地調査速報』（地域資料叢書4）を刊行した。当時九州大学文学部の学生と一緒にいった調査成果を報告したものである。およそ40人がかりであった。

中世怡土庄は旧怡土郡と志摩郡（明治以降の糸島郡）の過半を占めていた。前回での報告でふれることができたのは怡土庄域の一部分であった。多くが未調査のまま残されていた。気にはなっていたが、10年の歳月が流れてしまった。今回楠瀬さんがほぼ独力で、精力的な調査を実施して下さった。画期的である。楠瀬さんは旧糸島郡域の網羅的調査を目指した。調査の第一義はまずこの地域的な広がりにある。同時に質的な調査意義がある。私達は10年前には視点の多くを耕地とりわけ水田においていた。それは圃場整備事業によって、それまでの水田が持っていた多くの情報、地名や水がかりなどが失われるという危機意識にもとづいていたからであった。しかし水田が稼働するのは5月から9、10月までの4・5ヶ月である。一年の半分にも満たない。村の人たちはそれ以外の季節にも、それ以外の場所でも、さまざまに生業を営んでいる。

糸島郡には農村だけがあるわけではない。漁村もあれば、山村もある。海の幸・山の幸は田畠からの幸とはまた異なる富をもたらした。たとえば、木炭生産は米よりもよい収入をもたらす場合が多かった。

今回の調査報告ではこうした非農業部門に視線が注がれる。海には海岸のみならず、水中に隠れている瀬にも名前がある。海には土地所有権はない。水中のポイント地名は、そこを生活の場に行っている人にしかわからない。山には林業経営の必要上、谷にも、岩にもたくさん名前があった。炭が焼かれなくなり、木材が伐採されなくなると、それらは忘れられてしまった。

こうした知恵は非文字知、暗黙知として伝承される。民衆知でもあるが、ときにはまったくの個人知の場合もある。海に土管を沈めれば魚礁になる。コンパスや魚群探知機がなくとも、むかしの人は確実にその場所に行けた。船からの山当てを利用して、確実にいつでも行けた。だがその地点を知る方法は人に教える必要はないし、教えない。個人知であろう。

旧怡土郡と志摩郡には怡土庄以外にも、東大寺領船越庄や石清水八幡領長野庄ほかがある。今回はそうした荘園にも目配りがあり調査が行われた。船越庄では古文書（東大寺文書）の記載とつきあわせた成果があり、東大寺の各荘園の物流のありかたが、石鍋を素材に語られている。

さて、私は山好きだから糸島の南端、井原山にはよく登山した。脊振山地第二の高峰であるけれど、この山の名前は長く地図に記載



井原山東谷集落にて

がなかった。井原山村東谷・西谷はその登山基地である。しかし、山登りをしていると下山しても時間があまりない。聞き取りをしたかったが、ついつい先延ばしにしていた。今回 2008 年 10 月、楠瀬さんといっしょに聞き取りを実施できた。楠瀬さんは九州大学・九州文化史研究施設が所属する福岡県地価帳（帳簿）に着目した。井原山の項には張り紙があって、小字（土地台帳記載地名）ではないが、かつて村人たちがよんでいた呼称が書き込まれていることに気づいていた。それらの地名は聞き取りによって、ほとんどが復原できた。谷には名前があるし、谷のなかでも小さな平坦地あるいは淵などには名前がある。それらの場所を確定でき、土地に即した山の暮らしを聞くことができた。あの日は山の水田でとれた新米を賞味させていただいた。至福の時間帯だったと思う。

井原山という名前は井原村の奥にある山という意味であろう。いかにも当事者以外の第三者が付けたような名前である。佐賀県側ではこの山を灰払山とよんでいる。福岡県側にもそうした呼び名があるのではないかと思っていたが、たしかにあって、頂上を合戦場というとのことだった。

こうした成果が本書には随所にある。多くの情報を記録し、後世に伝えることができた。編者楠瀬さんの努力に心から感謝したい。

平成 21 年 2 月 2 日

服部英雄